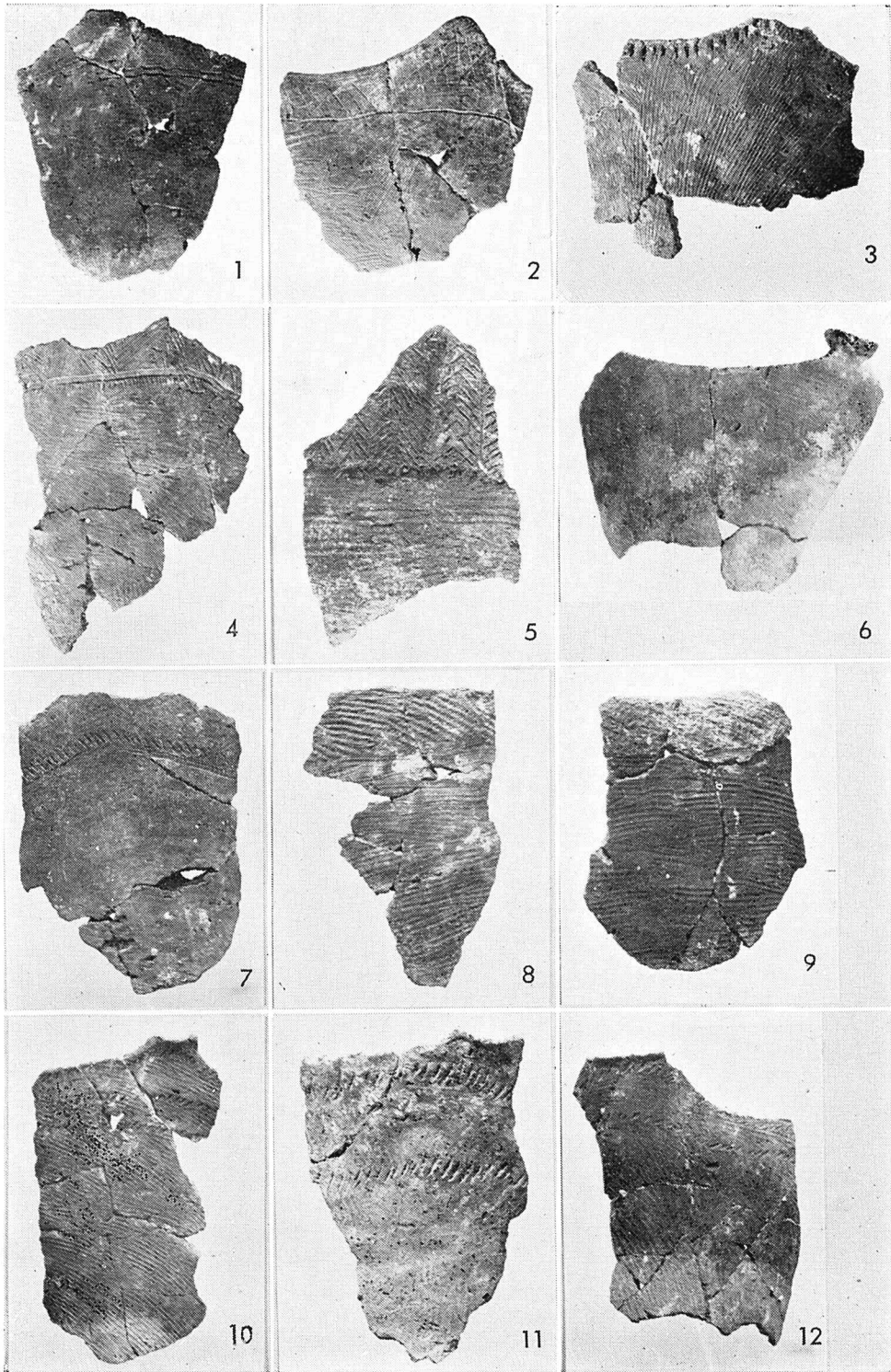


図版一 吉井貝塚の土器(一) 約 1/6



図版二 吉井貝塚の土器(二) 約1/6



下部貝層の直下からは、かなり多量の土器片が出土した。その数は千個をはるかにこえ、復原しうるものも二、三ある。これらの多くは、茅山下層式に含まれると思うが、茅山貝塚の典型的な茅山下層式と比較した場合、若干の差が指摘される。

下部貝層は、その規模がきわめて大きく、厚いところでは二メートルをゆうにこえる堆積がみられる。したがって、出土した土器の量も多く、約二万片を数えるであろう。この下部貝層は、いく重にもかさなつたうすい貝層群からなりたっているが、上下の層位による土器の差は、あまり認められない。ただ、斜面の上方に最初に堆積した貝層（CⅠH7・8区の第IV層）の土器だけがやや例外的である。これについては後述するであろう。他の大部分は、茅山上層式と認めるべきものであり、大部分はたんなる条痕をもつだけの土器である。この茅山上層式には、約一割の量の粕畑式相当の土器が伴なう。

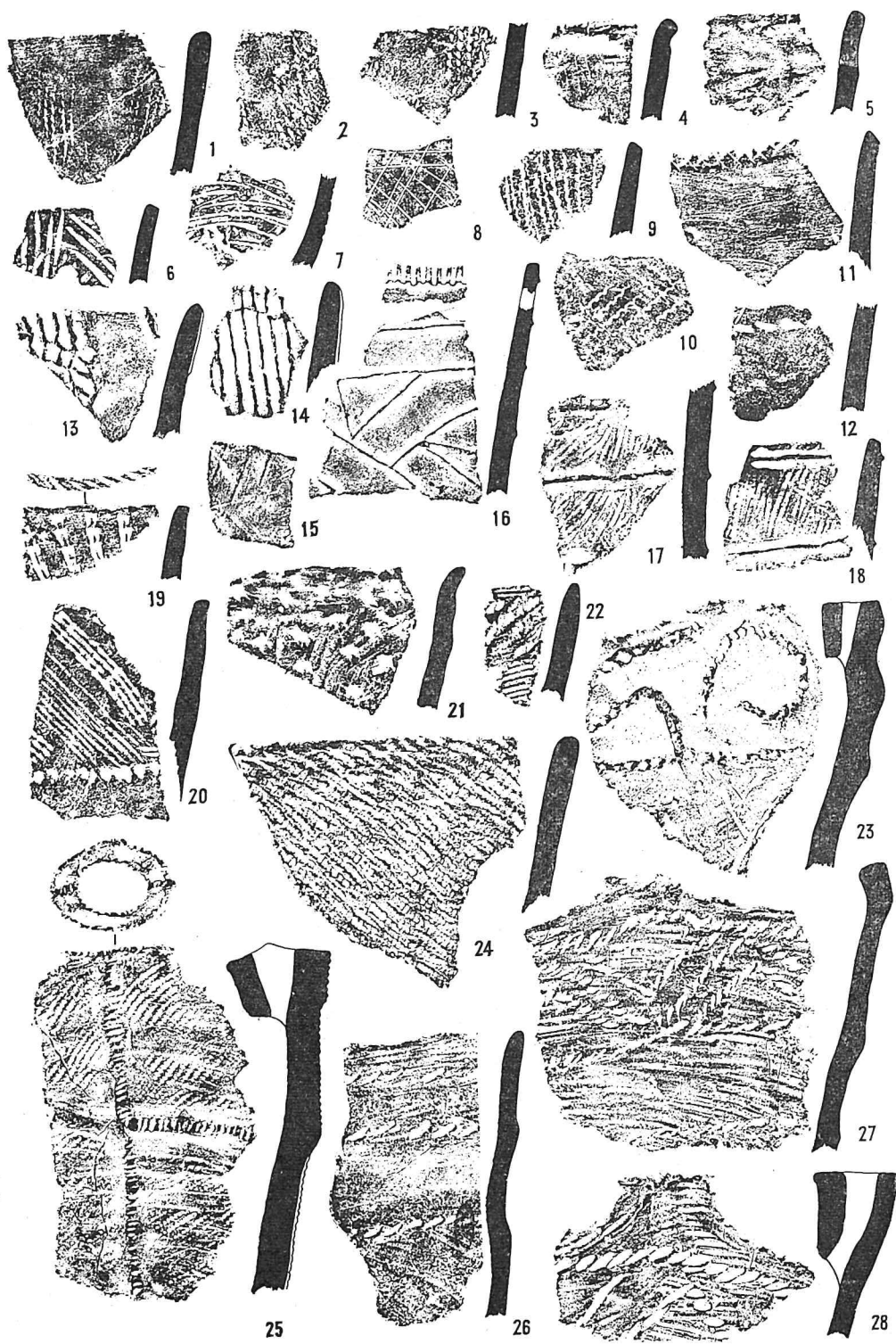
とくに貝塚の北半の、下部貝層の直上からは、条痕をもつた土器がかなり発見される。これらに混つて特殊な連続刺突文、あるいは凸帯文などをそなえた土器がある。この異質の土器は、いわゆる入海式に対比されるものであろう。しかし、ここでの主体をなす土器は、はっきりした型式としてとらえることができない。

中間土層は、北へ下降するにしたがつて厚さを増し、土器の出土も多くなる。この層の主体を占めるものは関山式であるが、その量はせいぜいリゴ箱に二杯程度である。これに混つて、諸磯b式、十三善提式、阿玉台式、勝坂式などに属する土器片が見出されるが、その数はごく僅かであり、「ある」ということが問題とされるだけである。

上部貝層は、G区付近で上下に境されている。そして、南側の古い貝層からは、加曾利EⅡ式が、北側の新しい貝層からは、加曾利EⅢ式（仮称）がそれぞれ出土する。したがって、それらの貝層の直下から発見される土器もちがつているらしいが、まだ整理が進んでいないので、くわしいことはいえない。加曾利EⅢ式土器を含む貝層の直上からは、称名寺式相当の土器がほぼ純粋に発見される。このように上部貝層と、その直下・直上からは中期末から後期初めにかけての土器が層位的に出土しており、しかもその量がきわめて莫大であることから、今後の整理研究に大きな期待がもたれるのである。

表土からは、新しい弥生式土器と、古い土師器の破片が僅かながら見出される。かつてこの遺跡から銅鏃の採集されたことがあるが、それ<sup>3</sup>はこれらの土器と関係あるものかも知れない。

以上のように、この貝塚からは、きわめて多種類の土器が秩序ある状態で出土している。しかし、そのすべてにわたる観察の結果をここに記述



第1図 貝層下土層 (1~22), および貝層直下 (23~28) 出土の土器 (1/3)

することは、与えられた紙面の範囲では不可能である。したがって今回は、下部貝層直上以下の土器、つまり縄文時代早期に属するものについてとりあげ、他は別の機会に報告したい。

### 三、貝層下土層の土器 (第1図1—22)

この層の土器はいずれも小さな破片で、その数も少ないが、型的には多くのものを含んでいる。文様の上からみると、a 擦糸文を有するもの、b 無文のもの、c 沈線を文様とするもの、d 貝殻文のあるもの、e 刺突文をもつもの、f 細隆起線で飾られたもの、g その他に分けられる。

擦糸文をもつ土器(1・2・3)は、おおむね淡褐色を呈し、焼きがよい。磨かれた器面に条間隔の比較的粗いRの擦糸文が走る。口縁はくらかふくらみをおび、その先端はまるい。稻荷台式の特徴をよくそなえている。三浦半島では、はじめての稻荷台式の確実な出土例である。

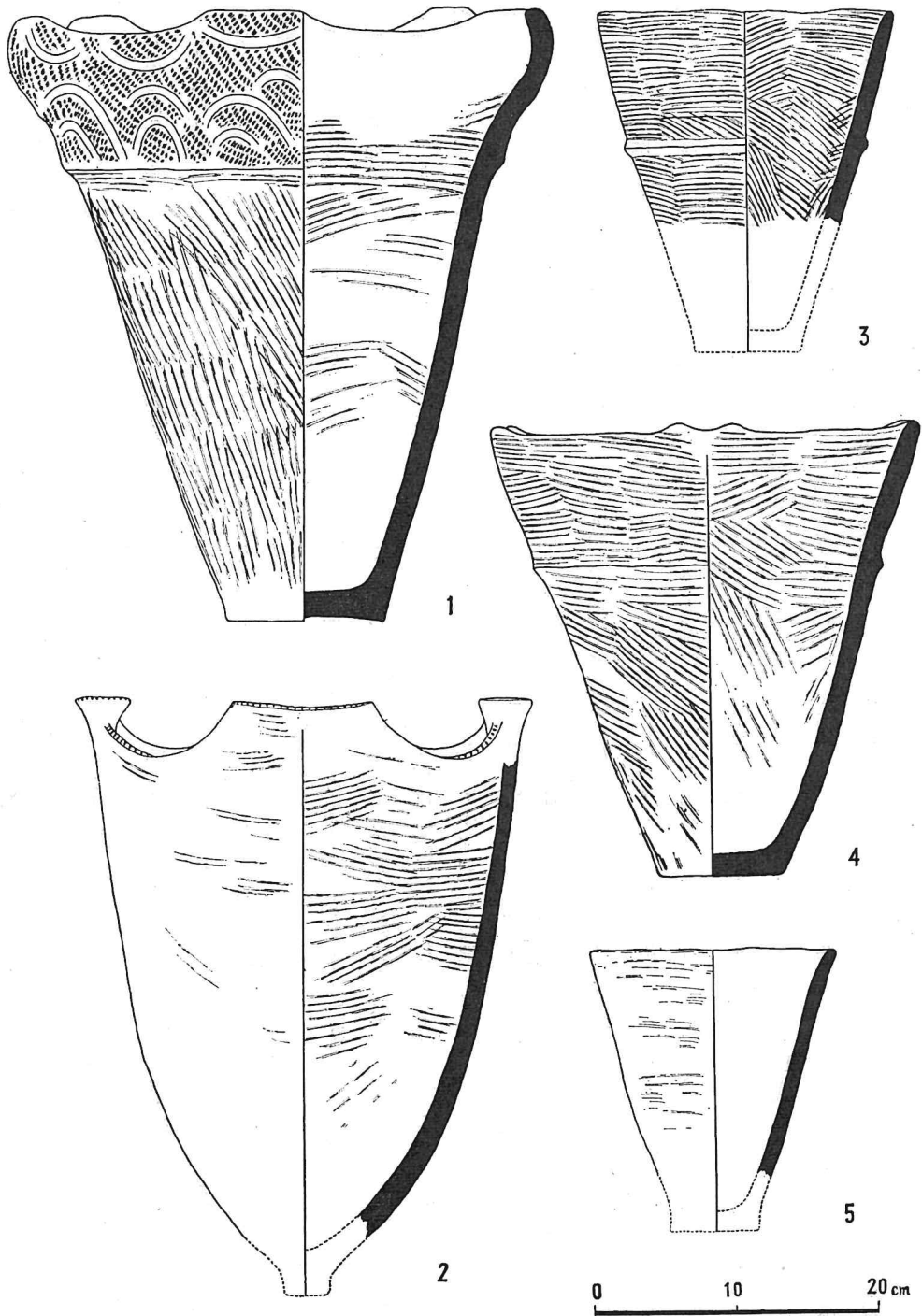
無文の土器(4・5)は、まるみをおびた口縁がやや外へふくれるのを特徴としている。表面には、かるい削痕ないし擦痕があり、平坂式のあのものによく似ている。

沈線を文様とする土器(6・7・8)は、あるものは太く、あるものは細いが、いずれも平行線を要素として、鋸歯文や格子目文などをあらわしている。底部にちかい破片は、鋭角の尖底につづくと思われる。これらは田戸下層式としてよいものである。また、刺突文をもつ土器(12)は、雲母末を含んでおり、簡単な刺突を一部にとどめているが、型的には沈線文の土器にひとしいと考えられる。

貝殻文のある土器(9・10・11)は、いずれも黒味をおびており、田戸下層式と同様に口縁の先端が外側へ傾いているが、僅かに繊維を含み擦痕をのこしているの、それとは区別される。貝殻の腹縁を押しして文様としたもので、おそらく他の土器(11)などとともに、田戸上層式に含められるであろう。

細隆起線で飾られた土器(13・18)は、いずれも僅かの繊維を含んでいるが、裏面に条痕はみあたらない。文様は一律でなく、複雑なものと、単純なものがあるが、野島式に発達する細隆起線文とは、いくらか異っている。子母口式のなかに類例があるように思う。他に、口辺付近に絡縄体らしいものを押捺した例がある(22)が、これは子母口式としてよいであろう。

この他に、用途不明の器具で刺突と結節沈線風の文様をつけた土器がある(19・20)。繊維を僅かに含んでいるが、裏面に条痕はない。焼きがよく、雲母末がたたくさん認められる。また、貝殻の一部で刺突をくり返し、文様としたもの(21)があるが、これは裏面にも文様が及んでいる。比



第2図 貝層直下 (1,3,4) および貝層 (2,5) 出土の土器

較的薄手であり、口縁には刻目がある。これらの土器の型式上の所属は不明である。

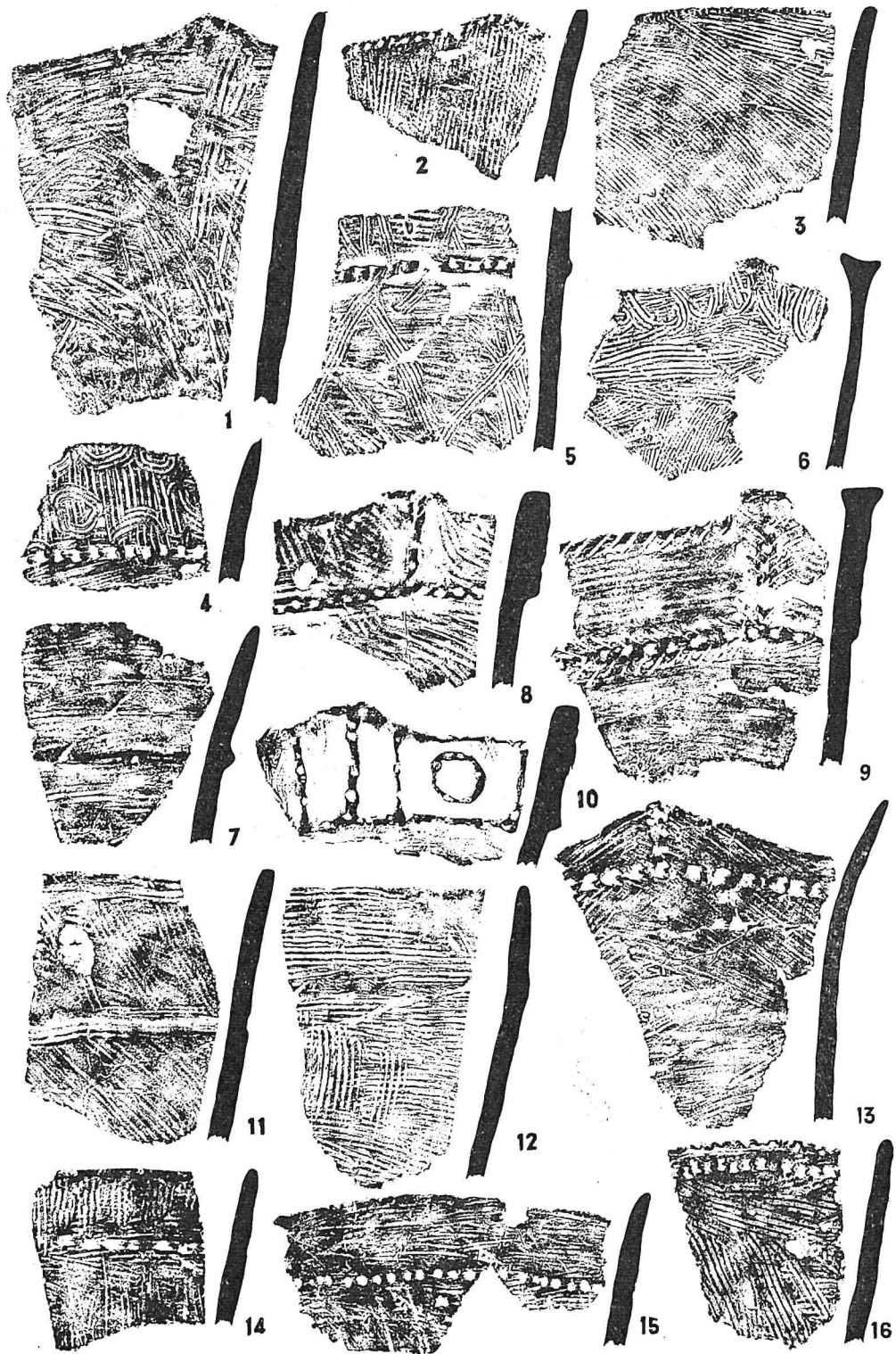
#### 四、貝層直下の土器（図版一ノ1・3—6、第1図23—28、第2図1・3・4）

下部貝層の直下からは、かなり多量の土器が発見されたが、形式的には比較的単純である。結論的にいえば、茅山下層式土器、連続刺突文を特徴とする型式の土器、ならびに茅山上層式土器の三つである。しかし、個々の破片をそれぞれの型式に矛盾なく措定しようとは限らない。ここでは、a 文様の変化にとんだ稜を有する形のもの、b 形はそれに近いが連続刺突文をもつ比較的薄手のもの、c それ以外のものとの三種類にわけて説明したい。

文様の変化にとみ、胴上半に稜をかたちづくる器形の土器（図版一ノ1・3、第1図23・25、第2図1・4）は、まず文様の上でいえば、縄文・隆線文・刺突文・凹線文などを主要要素としている。そしてこれらは、組合わさって併用施文されることが多い。縄文は、いずれも横に回転した単節の斜行縄文で、原体は撚紐二段の左撚りと右撚りの二種がある。すべての文様は例外なしに、稜より上の部分に存在する。稜は口辺付近を水平にめぐっており、その上下が僅かに屈曲するのが普通である。二段の稜はきわめて少ない。また把手を有するものが多く、その形は環状を呈する。底部は安定のよい平底である。これらを茅山貝塚の典型的な茅山下層式に比較すると、凹線文・列点文のきわめて少ない点で、また稜とくびれの屈曲度が弱いことで異っている。このちがいは、もとより相対的な差であり、茅山下層式のより退化した現象であると理解されるのである。

連続刺突文をもつ比較的薄手の土器（図版一ノ4・5・6、第1図26—28）は、爪形文風の刺突を横に三列連続的に押捺するのを特徴としている。この三列の刺突文は、器形と関連がある。つまり口縁にそって一列、上の稜にそって一列、下の稜にそって一列という原則をもっているからである。そして多くの場合、口縁と上の稜との間に、さらに二列以上の刺突文が山形に配される。これらの刺突文は、肋脈のない二枚貝の腹縁で左から右へ、連続的に施されたものであるらしい。形は、二段の稜とくびれをやや明瞭に示しており、底部は平底と思われる。同層位から発見される他の土器とちがって、比較的薄手である点に注意される。このような特徴をもつ土器は、CとH7・8区の第IV層、すなわち最初に堆積した貝層からも出土するが、この場合には茅山下層式的なものがごく僅かに伴うだけである。茅山貝塚から発見されたこの種の土器については、当時茅山下層式の一部として理解していたが、今回の経験は、それが——時期的な問題はともかくとして——形式的に区別されねばならぬものであることを教えた。





第 3 図 貝層出土の土器 (一) (1/4)

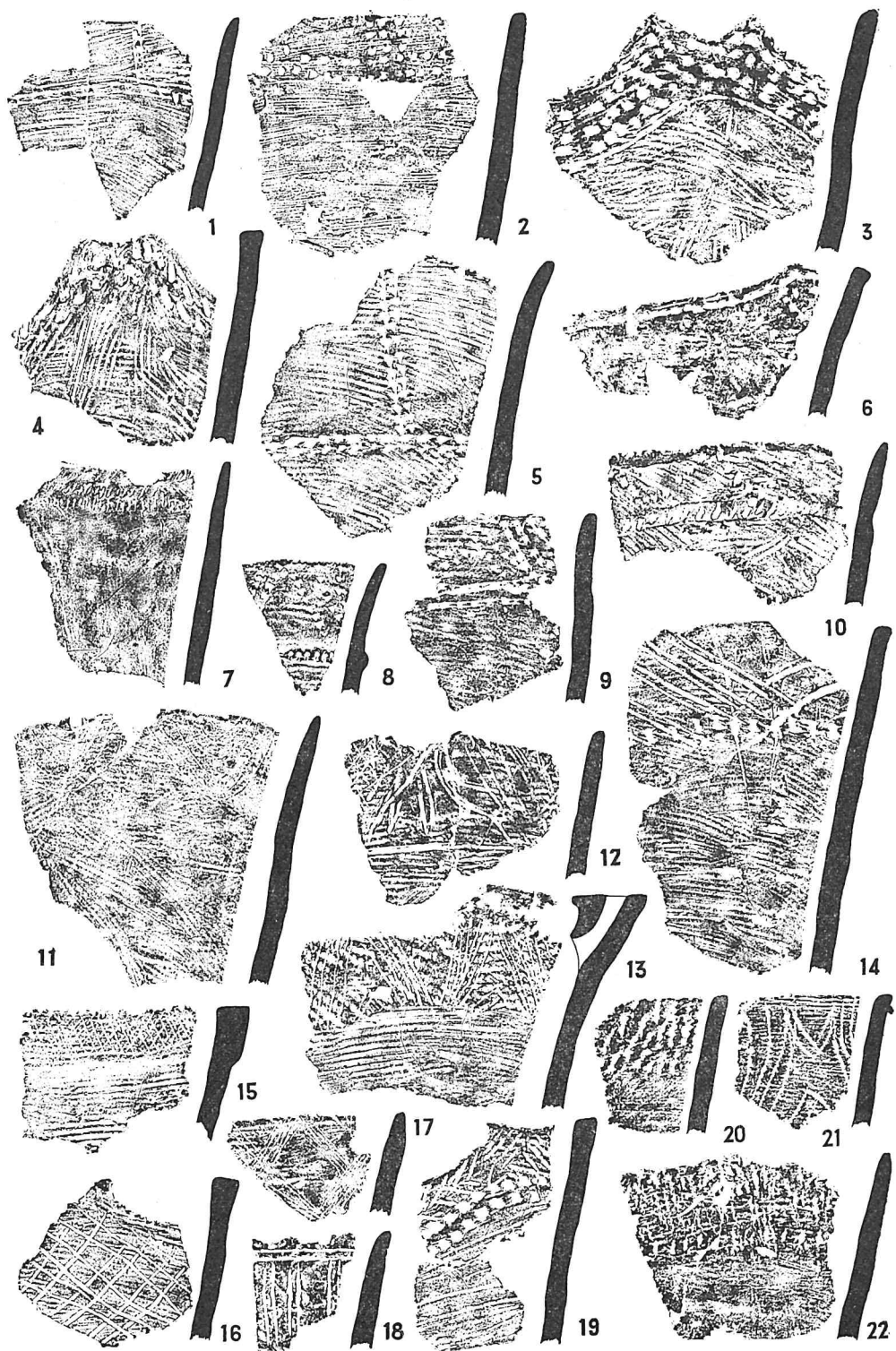
貝層直下から採集された土器のなかには、以上の二つの分類に含まれぬものが、少なからずある。それらは、胴上半の中央付近に篋状の隆帯をめぐらしたもの（第2図3）や、条痕を文様化したものなどであり、茅山上層式の特徴をそなえている。これらと貝層から発見される同種のものとの区別は、厳密にはむずかしい。しかし傾向的には、この種の土器は下部貝層のなかでも比較的下部に多いようすがわかる。

#### 五、下部貝層の土器（図版一ノ2・7-9、二ノ1-12、第2図2・5、第3図、第4図、第5図）

貝層中からは約二万片の土器が採集されたが、その大部分は表裏面にたんなる条痕をもつだけの破片である。口辺部についてみると、条痕以外の文様を有するものは、約三分の一程度にすぎない。文様はすべて口辺部に限られているから、この割合は実際の個体にもあてはまるであろう。文様には、どのような種類があり、またいかなる比率を示しているであろうか。口辺部の破片を概略的に調べた結果では、つぎのような数字をあらわしている。

a	条痕のみのもの	約	六〇、〇%
b	条痕を文様化したもの	約	〇、五%
c	隆帯文をもつもの	約	三、〇%
d	凹線文をもつもの	約	一、〇%
e	刺突・列点文をもつもの	約	一一、〇%
f	沈線による文様をもつもの	約	五、〇%
g	貝殻文をもつもの	約	一、五%
h	縄文を有するもの	約	八、〇%
i	爪形文をもつもの	約	一〇、〇%

もとよりこれらの文様は、それぞれ異なる役割をもちながら表現されているから、一律にみることはできない。また併用施文されているものも多いことも考慮されるべきである。しかし施文の方法は、一つのきまった約束でつらぬかれている。まず、口辺付近に一条の隆帯・凹線・刺突・列点などが、器面をほぼ水平にめぐっていることである。そして、これのみで他の文様をもたないものもきわめて多いが、さらに他の文様を有するものの場合には、それらと口縁との間に文様帯が形づくられる。しかし、その文様帯の構成はきわめて簡略であり、沈線による格子目文・鋸歯状文、刺突列点による山形文、斜行縄文などの単純な文様をあらわしている。したがって、これらの文様は基本的には、一次的なもの（隆帯・凹



第 4 図 貝層出土の土器 (二) (1/4)

線・刺突・列点」と、二次的なもの（文様帯を構成するもの）とに区別できるであろう。もちろん、このような約束からはずれるものもかなりあることを認めなければならない。とくに連続爪形文を文様とする一群の土器は、おもむきをかえている。このような理解の上にならば、それぞれの文様の実態をみていきたいと思う。

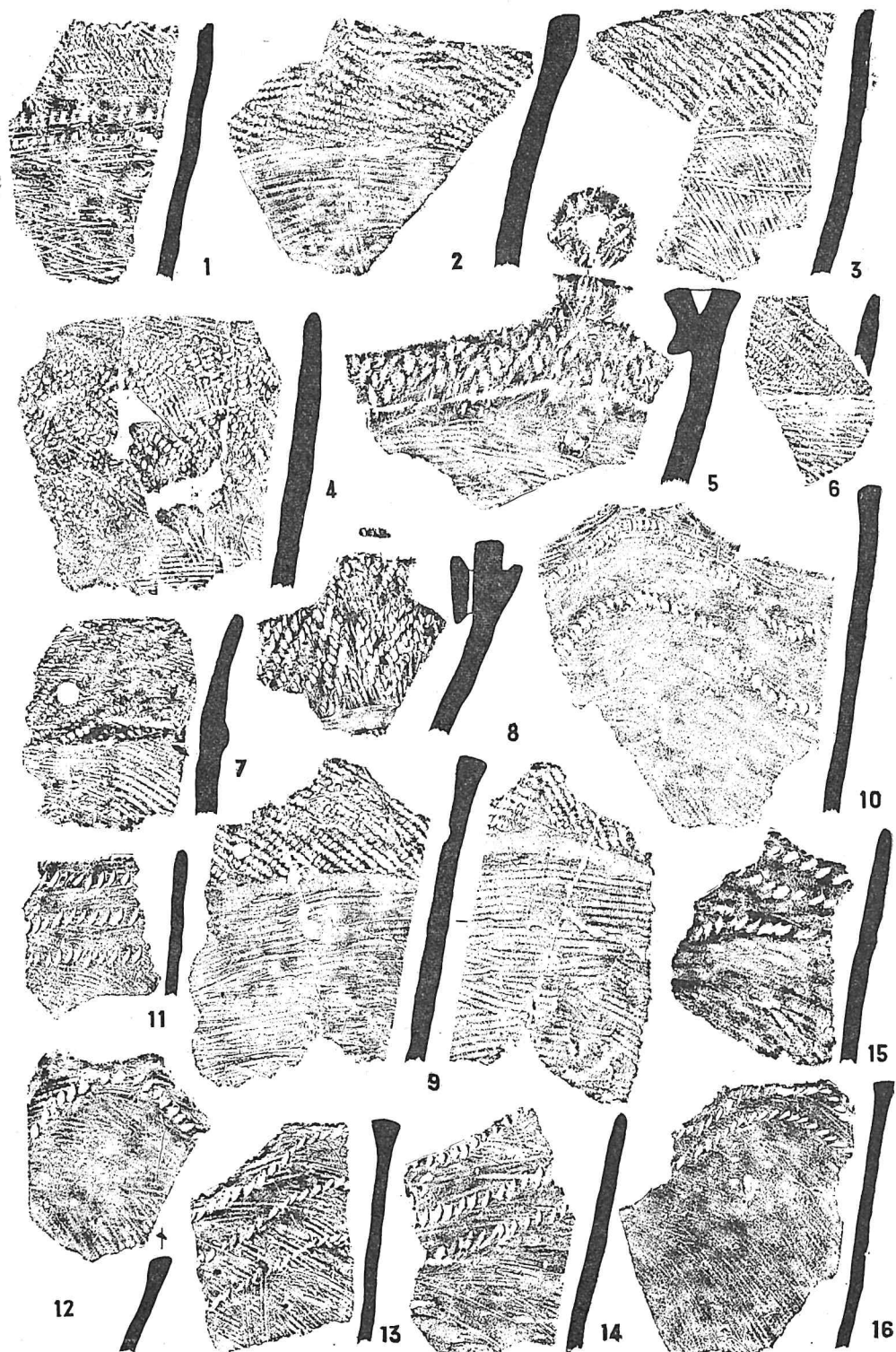
a 条痕のみのもの（図版二ノ6、第2図2・5、第3図1・3）半数以上の土器は、条痕以外にならぬ文様もたない。ゆうまでもなく条痕は、文様としてつけられたのではなく、粘土を固くしめることや、器面調整のためにおこなわれた手法である。下部貝層の土器の大半がこの条痕のみであるという点は、なによりも大きな特徴として記憶されねばならない。条痕の方向は一定していないが、胴以下では縦・斜に限られ、また裏面の口辺付近では横方向が多い。これらは肋脈のある二枚貝の腹縁で施されたのであるが、多いものは八条、少いものは三条位を一つの単位としており、普通では五、六条が多い。また、太い細いの差、深い浅いのちがいがあがあるが、あまり問題にすべきことではないと思う。器形については、のちに述べるが、条痕のみのものは小形の土器（例えば第2図5）にとくに多いらしい。

b 条痕を文様化したもの（第3図4・5・6）条痕を意識的に文様として利用したものが、貝層のうちでも比較的下部から、いくつか出土している。これらは円（4）、弧線（6）、斜線（5）、波形などをあらわしているが、表現は稚拙である。刺突列点あるいは、隆帯などの一次的文様をそなえているものが多く、またほとんどすべては、口辺付近に施文されているが、例外もある（5）。

c 隆帯文をもつもの（図版一ノ8・9、第3図7―10）胴上半の口辺付近に一本の隆帯を、あたかも筐状にめぐらしたものがあある。この隆帯は、文様としては一次的なものであり、結論的にいえば、先行する型式の土器にみられた「稜」の変形であると考えられる。隆帯の上には、刻目または押捺の加えられたものが多い。また、口縁の把手にむけて直角にまじわる隆帯をみることもあり（第3図8―10）、まれには隆帯を二次的な文様に複雑化させた例もある（10）。なお注意すべき点は、この隆帯をめぐらしたものには、沈線・縄文・刺突などによる二次的な文様が、ほとんどみあたらないことである。また単純な隆帯のみのものは、層位的には下部に属する。

d 凹線文をもつもの（図版一ノ7、二ノ4・7、第3図11、第5図9）これも一次的な文様であるが、その量は少い。凹線には、指頭でかいたような比較的中広いもの（図版一ノ7、第5図9）と、平らな先端をもつ篋状のものでかいた場合とがある。そしてこれらにも、沈線による鋸歯状文（図版二ノ4）や、縄文（図版二ノ7）などを二次的な文様として配したものと、そのみのもの（図版一ノ7、第3図11）とがみられる。

e 刺突・列点文をもつもの（図版二ノ3、第3図2、13―16、第4図1―10）刺突ないし列点は、最も多く採用された文様であり、全体の二割以



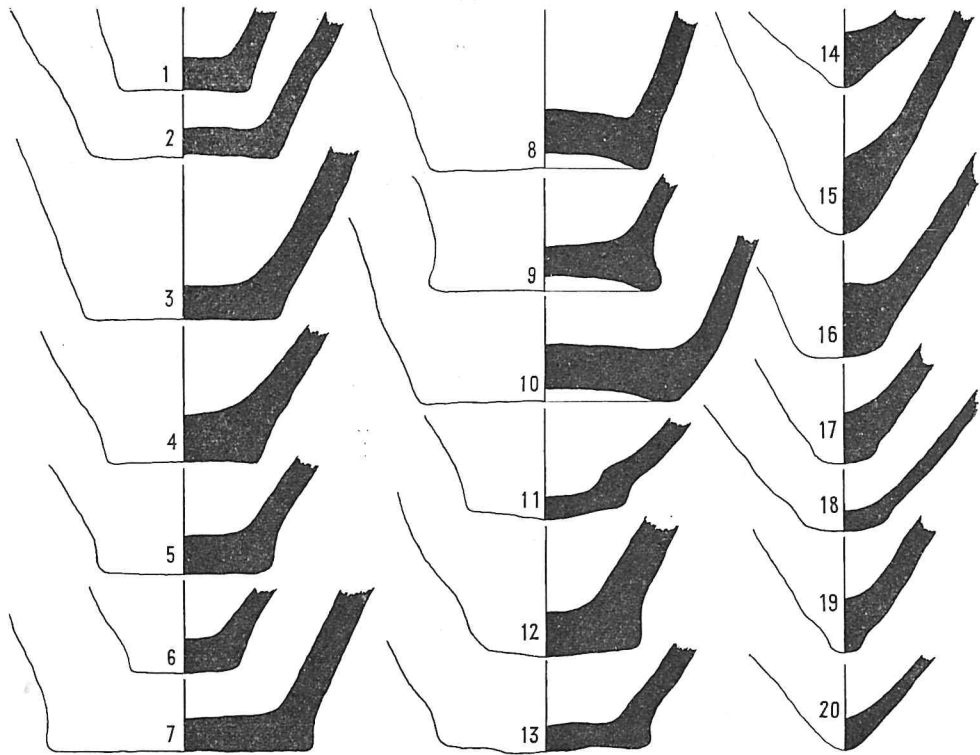
第 5 図 貝層出土の土器 (三) (1/4)

上を占めている。これらの施文に用いられた器具には、いくつかの種類があり、またその表現は比較的变化にとんでいる。施文具には、丸棒、半截竹管、貝殻の一部などが利用されているらしい。一次的な文様としては、口縁にそつて刺突列のならんだもの（図版二ノ3、第3図16、第4図4・6）、口辺部に一列の刺突のみをめぐらしたもの（第3図14・15）、さらにそれから口縁にむけて直角の列点の配されたもの（第3図13、第4図1・5）などの種類があり、また稀にはその刺突列が三条に及んでいる場合（第4図2）もみられる。なお、これらのうちには、条痕を意識的に縦に施した文様化したらしいものもある（第3図14）。二次的な文様としては、単純な山形文（第4図8―10）、充填文（第4図3）、などの他に小さな爪形状の刺突が三列にならんだもの（第4図7）があるが、これは比較的薄手であり、条痕の存在をみない。また、他の文様に付属して、一次的な文様としての役割を果たしているものも多い（図版二ノ5、第3図4、第4図14・19・22、第5図1・5）。

f 沈線による文様をもつもの（図版二ノ1・2・4・5、第4図11―19）沈線による文様もかなり多い。そして、この場合には、文様帯をかたむくづくるのが殆んどであり、一次的な文様のみもの（図版二ノ1）は稀である。細い沈線は、一次的な文様として有効ではないのであろう。重弧文（第4図11）、格子目文（図版二ノ2、第4図15―17）、鋸歯状文（図版二ノ4・5、第4図13・14）、平行線文（第4図18）、および羽状文（同19）などを表現しており、その種類は比較的豊富である。なかでも格子目文と鋸歯状が占める割合は多く、一つの特徴となっている。沈線はいずれも浅く細い。施文具には半截竹管がいくらか利用されている（図版二ノ1、第4図14・18）。一次的な文様には、沈線、刺突列点を利用されており、注意すべきことには隆帯をもつものがみられない。また、一次的な文様をもたない場合も多く、それらのなかには口辺部が帯状にふくらんだもの（第4図15）や、地文に縄文を有する例（同13）があげられる。

g 貝殻文をもつもの（第3図12、第4図20―22）いわゆる条痕は、貝殻の腹縁を器面と平行に移動させることによって生じたものであるが、これ以外に腹縁や背面を押して文様としたもの、つまり貝殻文がある。しかし文様としては、あまり盛行していない。一次的な文様として利用されたものは、貝殻の背を一列に連続的に押捺しているが、あまり効果をあげていない（第3図12）。二次的な文様（第4図20―22）は、いずれも腹縁を縦に単純に押したもので、一例（21）を除いては変化に乏しい。

h 縄文を有するもの（図版二ノ7―9、第5図1―9）縄文の施されたものはかなり多い。そしてこの場合には、その性格からして、すべて二次的な文様となる。つまり、いずれも口辺付近に帯状に回転施文されているからである。縄文の種類は、<sup>(4)</sup>撚紐二段のものが圧倒的に多く、うちでも左撚り（図版二ノ8・9、第5図2・4・6）が、右撚り（第5図7・8）をはるかにしのいでいる。殆んどは横方向に回転されたいが、なかには



第6図 底部の集成

縦方向とみられる特殊な例もある(第5図9)。そしてこれには、裏面にも施文が及んでいる。撚紐一段のものもいくらかあり(第5図1・3)、これらも横に回転されている。また条・節の乱れているものが多く、種類を判定できない場合がある。一次的な文様としては、凹線文(図版二ノ7、第5図9)、刺突文(第5図1・5)、隆帯文(同7)などがあるほか、なにも有しないものも多い。

i 爪形文をもつもの(図版二ノ10-12、第5図10-16)文様をもつ土器の一割は、この爪形文をもつもので占められる。施文具は、おそらく肋脈をもたない小さな二枚貝の腹縁であり、これを左から右へかるく連続的に刺突したものと思われる。爪形文は口縁にそって施され、一列(第5図12)、二列(図版二ノ11・12、第5図10・16)、三列(図版二ノ10、第5図11・13-15)の各例があるが、いずれも口縁の起伏にしがって曲線化されている。口縁の起伏は、皿状の把手ないし台形の口縁の結果であるが、これはいままで説明してきた文様の土器の場合より、はるかにいちじるしい。また、一次的なものとは二次的なものとの区別は、ここでは殆んど意味をもたない。爪形文をもつ一群の土器は、貝層直下出土の連続刺突文を有する薄手の土器と、おそらく関連をもつものであり、その退化した型式ではないかと想像される。そして薄手であるとい点でも、他の土器群から容易に区別されるのである。

さて、以上の文様をもった土器——条痕のみのものを含めて——

は、いかなる器形を示すのであろうか。部分的にみれば、口縁部の状態あるいは底部の形などに、いくつかのバラエティが認められるが、基本的には大きく二つのグループに分けるべきであると思う。一つはa類からh類までの文様をもった比較的厚手の土器（A群）であり、他の一つは爪形文をそなえたものとそれにつながる薄手の土器（B群）である。したがって量的には前者が圧倒的に多い。

まず、前者（A群）からみていこう。大きさは、口縁の直径三〇センチ前後のものが最も多く、二〇センチ以下の比較的小形のものもいくらか認められるが、四〇センチをこえるような大形のものも稀である。真上からみた口縁の形は、普通円形を呈するが、ときおり楕円や不整形のものもみられる。口縁には、いわゆる平縁と波状を示すものとの二種があり、その割合は一概にはいえませんが、ほぼ半ばしていると思う。しかし小形の場合には平縁に限られるらしい（第2図5）。波状口縁には、起伏の程度や形による変化がいくつかある。また、把手をもつものが多く、それには上面の平らな孔のあいた円形のもの（第4図13、第5図5）と、さらにそれをずっと小さくしたつまみ程度のもの（第3図6・9）などがある。また前者に属する把手のなかには、粘土の棒をつめた特殊な例（第5図8）も見出される。口辺部に隆帯や凹線のあることを除けば、形の上にはなんらの変化もない。そして屈曲を示すことなく胴部から底部へとつづくのである。つまり全体の形は、変化のない深鉢形をあらわしている。底部はいずれも平底であったと考えられる。貝層からは、平底以外のものも出土しているが、それらはB群に属する底部である。平底は歴然とした形の安定のよいもの（第6図1—9）が多いが、なかには不恰好な安定の悪いものもある（同11—13）。また、いわゆる上げ底もみられる（同8—10）。

つぎにB群の器形について説明しよう。大きさは、A群のものと大差ないと思われるが、ただこの場合にはあまり小形のもののみあたらない。また、確実に平縁といえる口縁は、きわめて僅かである。殆んどは波状とよぶよりも、台形といった方が適切なあたりの口縁で飾られる。そして、この台形の上端面は、土器の厚さよりも、いくらか厚い巾をもっているのが普通である（第5図10・12・13・16）。これが極端になると、把手と区別がつかない（図版二ノ10・11）。把手は、皿状を呈するものであるが、その頻度は少ない。このような台形の口縁と把手は、文様をもたない一部の薄手の土器（図版二ノ6、第2図2）にもみられるから、B群のなかには爪形文をもつものと、そうでない無文のもの——その量は僅かであるが——とが含まれることになる。口縁から底部までは、形の上になんらの変化も示さない。この点はA群の場合と同じであるが、底部にはいちじるしいちがいがあり、全体の形をかえてくる（第2図2）。底部は、尖底の先をつぶしたといった感じのもので、きわめて特徴的といえる（第6図16—18）。なお、はっきり尖底といえる形のものもあるが、これらもB群に属するのであろうか（第6図14・15）。



以上、A群とB群の器形について述べたが、この形の上にみられた相異は、製作のちがいにまつながっている。しばしば説明したように、A群はより厚手であり、口辺付近での厚さは普通一二センチ前後をはかる。一方、B群はより薄手であり、口辺付近での厚さは平均約〇・八センチである。繊維の混入も前者に多く後者に少い。焼成や色調は一概にはいえないが、A群には黒褐色をおびたものが多く、比較的脆い状態におかれている。それにならばB群には、灰褐色を呈するものが多く、保存はかなりよい。しかし、いずれの土器にあっても、胴下半は脆く、保存の状態は悪い。火熱をうけたためであろう。用途の上での区別は考えられない。

下部貝層の土器は、文様の上でa類からi類までの種類に細分され、器形・製作の上ではA群、B群の二つのグループに分けられた。いま、これらを型式論的な観点にたつて扱えば、A群×a類、h類、V類とB群×i類その他Vの二つに区分しようと思われる。つまり、前者は茅山上層式として認定されるものであり、後者は伊豆以西に分布の中心をもつ粕畑式相当の型式と判断されるのである。これらは下部貝層のなかに、ほぼ九対一の割合で共存していたのである。

#### 六、貝層直上出土の土器 (第7図)

下部貝層の直上付近からは、条痕をもった土器が小さな破片としてではあったが、かなり数多く発見された。これらのなかに文様をもつものがいくらか含まれており、そのうちには貝層出土の土器にはみられない特殊な文様も見出される。

いま文様の種類をあげれば、a条痕のみのもの(1・7)、b刺突列点文(8・9)、c半截竹管による乱れた沈線(10)、d爪形文(11・13)、e貝殻による結節状沈線文(12)、f刻目のある隆帯文(14・15)、g粗い縄文(16)、h貝殻文(17・20)、i連続刺突文(21・24)、j特殊な連続刺突文(25・26・28)、k擬似連続刺突文(27)などがある。圧倒的多数は条痕のみのものであり、他は数片あるいはそれ以下をかぞえるのみであるから、正確な割合は算出できない。

条痕のみのものは、とりたてていふべき特徴を有しない。しかし皿状の口縁(5)や、細くまるい小把手(7)をそなえたものは、口辺部に段をつくったもの(6)などとともに、注目すべき意味をもっている。なぜなら、貝層出土の条痕のみのものなかに、かかる例をみなかったはずである。刺突列点文は、口縁にそって一段(9)、あるいは二段(8)が施されているが、ここでは一次的なものと二次的なものとの区別は必要

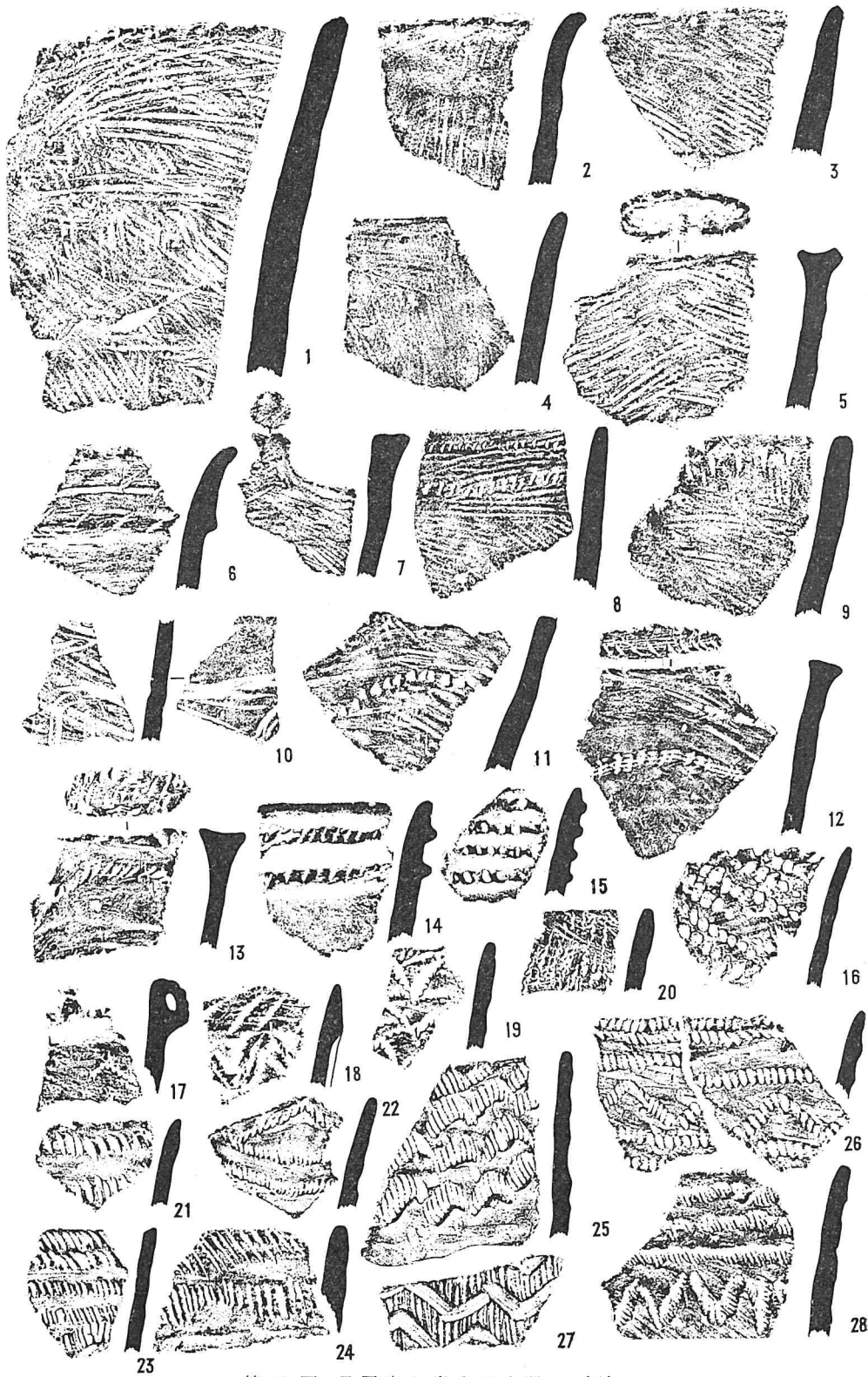
でない。

爪形文は、やはり口縁にそって連続的にならんでいるが、二列以上のものはみあたらない(11・13)。貝殻による結節状沈線文とよんだもの(12)は、その呼び名は適切ではないが、肋脈のある貝殻の腹縁の一部をひきずるようにして施した文様である。この文様の原理や、台形をなす口縁の形は、爪形文の土器にひとしい。刻目のある隆帯文は、口縁と平行に二段(14)、あるいは四段(15)が認められ、織維を含んでいるが、表裏面に条痕をもたないことを特色としている。縄文は、節の粗いもので、撚紐二段左撚りのものを横に回転している。きわめて薄手であり、口縁には刻目がある(16)。貝殻文は、いずれも肋脈のある二枚貝の腹縁を利用したもので、装飾的な効果をねらっている(17・20)。口縁の形には、輪状の把手をつけたもの(17)や、帯状に段をつくった特殊な例(18)がみられる。

かりに連続刺突文と名付けた文様は、爪形文によく似ているが、間隔の密なことで、また縦位をとっている点で一応区別されるし、さらに重要なことは、条痕を有しないことで特徴づけられる(21・24)。特殊な連続刺突文とは、前者に曲線的な要素その他を加えたもので、施文具は貝殻による場合(25・28)と、そうでない場合(26)とがある。同じく条痕はみられず、裏面には凹凸がはげしい。一つの破片(27)は、これらを擬似的に表現しようとしたものであろう。

以上、貝層直上の土器について、その文様のあらましを説明したが、これらがいかなる器形を示すかは、零細な破片のためよくわからない。しかし、部分的な器形から判断して、いずれの場合にも複雑な形を考える必要はないと思う。底部は尖底ないし、それに近いものなどが発見されている(第6図19・20)。すべて多少の織維を含んでいるが、条痕のみのものと刺突列点文をもつものが概して厚手(口辺付近で平均約一センチ)であるのたいし、それ以外のものが薄手(口辺付近で平均約〇・七センチ)である点は、きわだった対照として注意されよう。

貝層直上の土器は、時間的にみれば貝層出土のものより遅れた所産である。この遅れたという事実も、型式のちがいにみつけている。貝層にはまったくみるのできなかった一群の土器、わけても刻目のある隆帯文や、特殊な連続刺突文などをそなえたものは、形式的に明らかに別種の土器であり、帰納的にいえば、入海Ⅰ式ないしⅡ式のなかに類例が見出される。しかし、入海式は分布の中心を伊豆以西におくものであり、また貝層直上の主体をなす土器は、特殊な文様の土器ではなく、条痕のみのものを中心として構成される。この条痕のみの土器は、貝層出土のものに比較して、いくらか異なる点はあるが、型式差としてはっきりとえられるまでにはいたっていない。おそらく茅山上層式につづく型式が、そのなかにかくされているであろう。だが、いまはなんともいえない。



第 7 図 貝層直上出土の土器 (1/3)

七、茅山上層式土器の内容

われわれは吉井第一貝塚の大半を発掘し、膨大な資料をえた。下部貝層からは、じつに二万片にたつする土器が採集されたが、これは一つの貝塚に含まれる土器のすべてではなかったとしても、それに近いものであったことは疑いない。そのほとんどは、茅山上層式ないしそれに併行するものであり、底部の破片から推すと個体数は二百数十にたつする。これらの資料をえて、茅山上層式土器の内容はきわめてあきらかとなってきた。茅山上層式土器は、平底の深鉢形をほとんど唯一の器形とするもので、その大きさは口径三〇センチ前後のものが最も多い。口辺はやや外側へひらくが、それ以下底部までの間には、なんらの屈曲もカーブもみられない。底部は普通の形の平底であらわされる。文様を有するものは少ない。個体の上でいえば、約三分の一程度の土器の口辺部にのみ文様がのこされている。これらはその性格上、文様帯を区切る一次的なものと、文様帯を構成する二次的なものとに区別される。一次的な文様には、隆帯、凹線、刺突・列点などが利用され、一条を単位として口辺部を水平にめ

茅山上層式	茅山下層式	鶴ヶ島台式	野島式	
<p>表面に貝殻による条痕を有し、胴上半ない裏面に付近に文様帯をかちづくのを一般的特徴とする</p>				
文				
要素				
沈線 刺突	刺突	指頭など	竹管	細隆線
様				
表現				
格子目文 斜行細文 (文様は稀少)	列点文	曲線文	刺突文	幾何文
器				
口縁				
波状 平緑 (把手あり)	小波状 平波状 (把手盛行)	小波状 平緑 (稀に把手)	小波状 平緑	平緑
胴部				
変化ない、凸凹をめぐらしたものがあ	稜とくびれを示すものが多い	稜とくびれを有する	稜とくびれを有する	屈曲を示さない
形				
底部				
平底 (尖底をとく)	平底	平底	ほとんど底	ほとんど底
製作				
やや厚手、繊維の混入かなり多い	多い	やや厚手、繊維の混入	より厚手、形が大きくなる	やや薄手、繊維の混入僅か
その他				
伴出				
文献				
本誌	赤星・岡本 「茅山貝塚」横須賀博物館報告一	赤星直忠 岡本勇 「三浦市鶴ヶ島台遺跡」横須賀博物館報告四	赤星直忠 「神奈川県野島貝塚」考古学集刊一	

ぐっている。二次的な文様は、それと口縁との間に配されたもので、条痕を文様化したもの、沈線であらわされた格子目文・鋸齒状文、刺突列点による山形文、ならびに斜行縄文などを主なものとしている。これらの意匠はきわめて単純である。茅山上層式の忘れてはならない一つの特徴は、その大半がたんなる条痕のみの土器であるという点である。すべて繊維を含んでおり、口辺付近での厚さは、平均一二センチをかぞえる。

このような特徴を有する茅山上層式土器は、いままで茅山式土器の名で一括してよばれてきた野島式、鶺鴒台式、茅山下層式などと比較すると、あきらかに異なる型式的な要素をそなえており（前頁表参照）、一個の型式として認定するに十分である。

茅山上層式が、茅山下層式のつぎに編年されるものであることは、茅山貝塚の発掘の結果でもあきらかなことであつたが、また今回の所見によってさらに裏付けられた。茅山上層式は、その直前に編年される茅山下層式を母胎として生れたものと考えられる。両者の器形と文様を比較すると、それぞれ相通ずるものがあり、しかもそれは前者の退化した姿であると理解されるのである。しかし、相容れない要素も認められ、それらについての解釈が必要とされてくる。縄文は、両者にみとめられるが茅山下層式には僅少であり、茅上層式にはかなり多い。このような変化は、内在的なものとみるより、むしろ他からの影響であるかもしれない。

吉井貝層	貝層	貝層直下 最下貝層		
鶺鴒台遺跡			褐色土層	ローム層直上
茅山貝塚	上部貝層	下部貝層		貝層下土層
野島貝塚		上部貝層		下部貝層
	茅山上層式	茅山下層式	鶺鴒台式	野島式

格子目文・鋸齒状文などは、茅山下層式にはたえてみられない要素である。これらに他地域のものとの関連が認められないとすれば、茅山上層式を特徴づける独自の要素ということになり、他の文様とは別視されるのである。

#### 八、茅山上層式土器と粕畑式土器との関係

吉井第一貝塚の下部貝層からは、茅山上層式土器に伴って、爪形文を主な文様とし、皿状の把手・台形口縁・特殊な尖底などをそなえた薄手の土器の一群が発見されたが、これらはいわゆる粕畑式相当の土器であると認定された。このように、今回の発掘によって、茅山上層式に粕畑式相

当の土器が伴存するという明瞭な事実を教えられたが、その量的な関係は、約九対一の割合を示していた。

粕畑式土器は、かつて吉田富夫・杉原庄介両氏によって発表され、いわゆる茅山式併行のものと考えられてきたが、戦後石山貝塚あるいは入海貝塚などの調査によってその概念がふかめられ、また静岡・愛知・岐阜・長野・三重・滋賀などの各県にわたって分布することがあきらかとされてきた。このように分布の中心を伊豆以西にもつ粕畑式土器が、三浦半島の地でかくも多量に発見されたという事実を注意しなくてはならない。

伊豆半島北部では、伊東市上ノ坊遺跡など数カ所の遺跡から粕畑式土器の発見が報告されている。とくに上ノ坊遺跡の粕畑式土器は、報告者の江藤千万樹氏によって、吉井貝塚の爪形文土器と比較されたことのある<sup>(7)</sup>いわれをもっている。そして、江藤氏が「粕畑式が伊豆では茅山式より、一般的である」という事実を指摘されているごとく、伊豆は確実に粕畑式の分布圏に属するのである。吉井貝塚にのこされた粕畑式土器は、おそらくこの伊豆にハイマートをもちものかもしれない。茅山上層式土器に伴って、石皿や磨石などに利用された伊豆産の多孔質安山岩が多量に発見されるが、これらの供給は粕畑式土器の伝播と表裏をなすものであったろう。

なお、われわれは粕畑式土器の先駆型式として、貝層直下から発見された連続刺突文をもつ比較的薄手の土器(図版一ノ4—6、第1図26—28)を考えているが、まだ確信をもつまでにはいたっていない。

### 九、茅山上層式土器以後の問題

滋賀県石山貝塚からは、早期末の土器型式が層位的に出土したが、これとわれわれが三浦半島で確認した型式編年の結果、ならびに今回の吉井貝塚での所見とを対照すると、上のようになる。

(吉井 貝塚)	(三浦 半島)	(石山 貝塚)	(石山 山塚)
貝層直下層	野島合 鶯ヶ島台 茅山層 茅山上層	++++ 粕上入 入石	++++ 畑山I II山 島
貝層直上	++++	木	
中間土層?	花積下層		

この表であきらかなように、茅山上層式以後には、なおみだされな<sup>(8)</sup>い空白のあるのを認めねばならない。下部貝層の直上付近から、一群の条痕土器が発見され、そのなかには入海式類似のものが含まれていた。しかし、入海式は粕畑式とおなじく伊豆以西に分布の中心をもつ土器であり、しかもここでは同様な関係が考えられる。愛知県入海貝塚の土器を標準とした入海式土器は、さらに細分され、I式、II式の区別があるが、貝層直上の土器のなかには、双方の要素をもつものが見出される。しかるに、ここで<sup>(9)</sup>の主体となる土器は、一つの型式として認定しうるほど十分な根拠をもっていなかった。われわれは

今後の課題として、その存在の予想される型式の内容をあきらかにしなければならぬ。また、上ノ山式ならびに石山式相当の時期のプランクをうめるための仕事をつづけるべきである。これらは、それぞれにどんな姿を示すものであろうか。縄文文化の早期の終末をあきらかにし、前期の開始の事情を考える上からも、また土器型式の交流を究めるためにも、それらの問題をさけることはできない。

なお、最後に、かずかずのご教示とご援助をたまわった赤星直忠先生と横須賀考古学会の諸君にたいし、ふかく感謝したい。

#### 注

- (1) 赤星直忠・岡本 勇「茅山貝塚」横須賀市博物館研究報告 第一号
- (2) 岡本 勇「三浦郡葉山町馬ノ背山遺跡」横須賀市博物館研究報告 第三号
- (3) 赤星直忠「神奈川県三浦郡吉井貝塚調査」史前学雑誌 九卷六号
- (4) 山内清男「縄紋土器の技法」世界陶磁全集 一 所収
- (5) 伊東信雄「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北大学奥羽史料調査部研究報告 第二
- (6) 吉田富夫・杉原莊介「尾張天白川沿岸における石器時代遺跡の研究(一)」考古学 八卷十号
- (7) 河辺寿栄・佐藤民雄・江藤千万樹「伊豆伊東町上の坊石器時代遺跡調査報告」考古学 十卷八号
- (8) 坪井清足他『石山貝塚』平安学園考古学クラブ
- (9) 大参義一「愛知県入海貝塚の土器について」古代学研究 九号、中山英司『入海貝塚』愛知県東浦町文化財保存会

遺物発見地地名表(四)

横須賀市小矢部町衣笠公園	弥生式土器片	赤星直忠
同 同 同西方山腹畑	有柄石鏃・土器片(無文)	田中すき
同 平作町福泉寺西方畑	土師器片・須惠器片	橋本良男
同 長井町番場の台	くりいれ磨石斧	神沢勇一
同 同 諏訪の上	縄文式土器片(カソリエII式)	同
同 大矢部町満昌寺前畑	土師器片・須惠器片	赤星直忠
同 東浦賀町平根山	縄文式土器片(茅山式)・須惠器片	岡本直勇
同 逗子市池子・中町	弥生式土器片(久ガ原式・前野町式)	浅川紀生
同 同 神明社裏	縄文式土器片	須賀由也
同 ひろう山山頂	土師器片	赤星直忠
三浦市三崎町大棒寺裏山(古墳)	埴輪片(人物・馬・かぶと・円筒)	浜田勘太
同 向ガ崎陸橋附近	土師器(高坏)滑石製模造剣	同
同 歌舞島(海触洞)	土師器(和泉式I埴半欠)	株田留吉
同 城ガ島・養老子	縄文式土器片(茅山上層式・カソリエ式)	浜田勘太
三浦郡葉山町堀内・武田寮内	弥生式土器片(後期)・土師器片(和泉式)	小峯海平人
同 一色公園内	土師器片	赤星直忠